

## 逝く夏

湿った南風が雨戸を揺らす  
懐かしい音  
古くなった我が家を  
労わるかのごとく撫でてゆく

眠りと  
夜の闇との間を往復しながら  
次第に  
幼児のように身軽になってゆく

網戸を風が通り抜ける  
こすれるような  
ふるえるような  
音

初めて  
死を意識した  
朗らかで  
夢のような――

いつの間にか  
逝く夏とともに  
「わたし」はもう溶けてしまった  
跡形もなく

(2012.8.14)